説叢大全

春之部 上

へ
刺
1061
1

芭蕉發句

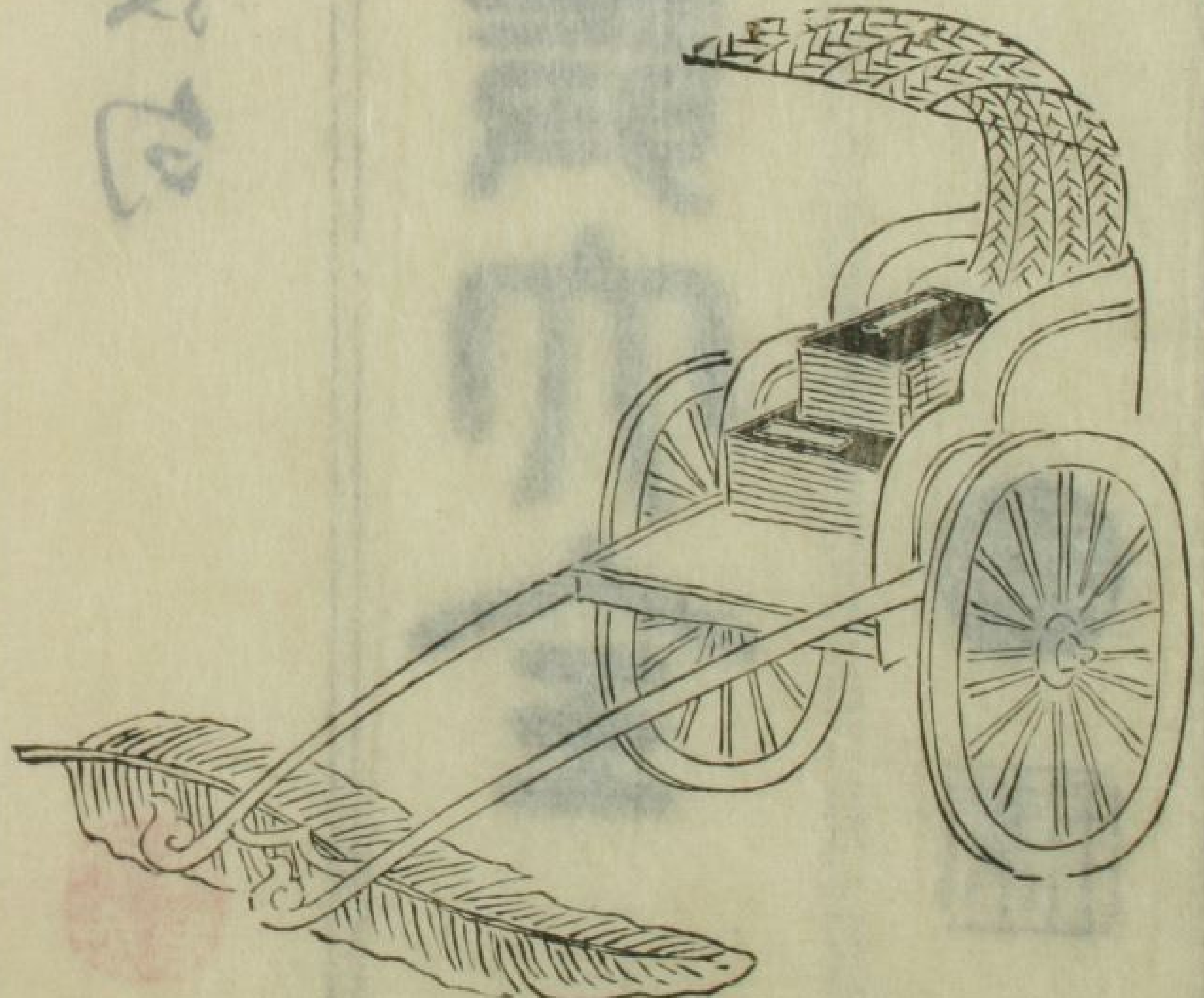
説叢大全

早稲田大學圖書

門 別 號 1061 巻 1-5

敘

源氏物語川乃流派ハさるもの
みく按ハ小あてたる是をちな安さき
ゐ智ひさきハ世のてもつきさきのみた今
旦ハ松哉しの代るへし紀路ふ至らふ
なふおよ浦乃深の玉藻もらさくなる



中比古へのされことを誹諧と名つけゝる
世よりこのかた近代に飛濃の穂包
乃えらびたる千筋に分(?)初して法をいひのべ
の連歌といふものゝ出来(?)て今のごとき
ちひの生まれつる世(?)になんあめるその
時に山崎の宗鑑并洛(?)の治元いせの守武

都乃貞徳とて宗匠し芭蕉といへるハ
その貞徳の流をくみし法師季吟に
従へうけ継のちやゝそのなかすゝ派立記
かへられハ中古世乃祖とやうにおもの事
ありしてわ家よくいてよて継ひてあこの離
花鳥月雪乃時をつけ打かゝまてい出

ぬる玉簾ん蚊ハ百千萬乃囀るまされハ
かゝり虫く蛍乃飛のそりてましらに似るを
出しこなき境紙也とてハ伊勢乃役紙
まちやよひのそつるを近江の人とましこ
かゝりまさハ時鳥をきゝて名尺乃阿やめの
誉けるきてしきを引いて唐つきて畫

寝きふるてとを秋風よりよせ氣井乃
月の秋もまてのこた池のこ流乃かのきは
またいひあるもし志るとの月にいりんめをつる
人乃ねさめ現にもひやりたる數多心の出
かゝ子辭源氏をもるに似ることえ思ひとくの
女人にまきたちやうかゝなへたるもしものな

きよしとかゝ出て志をうせぬ山路をと行
んとしてあしねうへまゆひ拙きをとそ屋
甚よてハ画こそ足清くしものたくみのう
ぬ紙今その度かには世や乃八重葎のし
ろきみせかゝみ三津のうえのよし河しと
えらみて家と乃こよのきの紫紙かまあ流

めくらせハ落涙き筆むしるとなりて茶たん
よ紙川のいろくもをと大かまへしゝと
なんりよとも紙もて名をせしと道のいへるとき
ふくの海よく志るしおくりて硯乃底の河きと
たくの為るかひ飛して紙うるかくの字たてて
しきまでて筆のうへ川たしかゝ鶴たちの

水乃江の世にふしみの猿子かいた
をしてとふ明和九年うつきのころしめつ
かきくのわれ志とおもふべし

新安道明阿弥陀仏

海

説叢大全序

夫人感物而動者性之欲也含齒戴髮所不能無嗟詠嘆比興相移不淫不傷芭蕉君桃青其人也清心以見常風雅以為生一

笠一製曾無長物朝遊上苑夕到荒邨朗然胸次思無邪乃不識錦囊之重者也所謂不得天下之至美與至樂而樂者非白駒既過而不息積有弓曰芭

蕉集近來其注疏出之三部曰師走袋曰評林曰句解斯不知翁者所為而唐突西施刻畫無鹽惜哉金篇玉章變作瓦礫一旨引衆旨莫甚焉古云解之愈

增懵懂者耳於是葛飾素堂第三葉絢堂君素丸俳林翹楚詞海長鯨為之忼慨夢寐於桃君十年于茲涉獵百家于神于儒捃摭掌故始功一簣九尋已成

殺青五卷名曰說叢大全嗚呼可謂淘汰之勤矣擲之則鏗然有金石之聲既讀而從來之三解瓦解氷消秦鏡當臺妍醜無所逃胡漢自分點竄有日隱

括之極矣是實后世之典型天今降穎素丸君回蕉門既倒之瀾獨得桃君感發之眞也六義即粲然鉛槧之功不在禹之下不亦愉快乎予先人桃翠昔日

遊于翁門從事於此有年不恐恝然棄棠蔭之遺愛故丸君被屬以序謝不敏不可予以先子之號亦嘗丸君之所命也於是乎古毛州陳人那須桃翠序於

東都感應樓

皇龢明和辛卯夏五月

凡例

一 袋 云と記もは。師走袋の説を挙るなり。

一 林 云と記もは。評林の説を挙るなり。

一 解 云と記もは。句解の説を挙るなり。然れども。並ちくして事長きは略して。本文に併入るべし。

一 説 とは予が管見を記し。其外古人の實記。或は實録。古集等より。散在せる句評なりを挙て證とし。又は翁の上綿よりして正きなりを。又書名ありとなるもちなり。あまたも合、出所そてしまきを要とし。諸名家の説てをあれあるもの。説叢めして。大に全しとは先射なや。

一 證歌、詩文、故事、等の類や、まぎるゝ文字假名遣へるなどを正す。

一 或書、或抄、なとに泄すハ、古人の着述もあり。又當時近来の作も有。其名目あげざれば、聞ものゝまぎれ物に、又言ひて名もなく、徳をもする人のあらる書あれども、其叢類をば泄し侍。何れとさへわからぬ記さず。

一 三部のうちに、読て足らざる句、此所の足らざる條を補ふ。但秘真、口傳等ハ畧す。

一 句によりて、其ふる今まぎらはしきに注解し、古きものゝ出所あり。其叢なるハ略し。用あるは泄し。誤りあるハ許し、足らざる條をば増す。

一 四季の句乃す漏らしに、増補し泄すハ、右三部の他よりもれし句の、古人の評説あるを見て抜き出しよせて志るす。又亭が管見おりふしに考ある八、古すをも引き加へて、全く其あられに、補ひ増するもの也。

一 假名つかひハ古今の二つありて、古しへハ正しく、今のハ定まらず。家々の私ありて、好みに志たがひて、徹底なし。然し彼ら此書を引る所も、既に世に行るゝ所を、正しからんハ其まゝに志るして改めず。翁の句としたるに、今書加ふるものハ、悉く古書みよりて正しくせりとそ。

以上 十條

凡例終

蕉翁發句說叢大全巻第一

總論

古人の曰。一書を得て證とするに足れりと。先達。明師。博才。碩徳の人乃書なからむハ一書なれもたりなん。其餘ハ近来の輩此に何如や。爰に芭蕉翁の發句あるを或ハ注し或ハ評しなどして解して其書三部あり。いはゆる師走袋。評林。句解是也。おそらく閲るに。なかには混里或ハ邪にあるは解を摸羅含糊なるかは文蛇足ば添るもあり。其中に至て邪妄なるハ師走袋に至て尤甚し。評林通例の事にして其文意わきがたく紀を多し。句解。ハ杜撰もなく許を得ぬと見ゆるなれ。證辞なきなり

○巻第一

常さそ怪も粗見えし。解にわたらざるなきにしもあらず。志あるまゝ見え。今の人ハ今をはじめ諸体の人、その證あるを得へ文むしてこそ翁に對していふにやせん。今志ばらく標弋黄嘴をおかして、三部の虚実を正し。又ハ正解たるハ賞し、分明ならざるハ略して、もとよりいはしへる事。今よりありて知がたきは、後の明鑑を俟。師走袋の序に云。今代の人翁が餘流を汲といへども、志うすき翁が句意ハ寒夜に嘯蚤のごとく、枯木に接たるにて皆あさましとぞ計見る人稀也。いはて翁の句意を知らずして翁の門にたちぬ人がらむと。蓋見蠡測を顧して、翁が句中に世人の通解しうるものを取て、是が注をなすと云。然れども翁の句意を知らるゝ注とはしらく又えがたく、翁を責て、おのれが邪を弘めむとするもの也。先年はいかは蓬莱の初役乃句注に、伊勢海老、汝ハ伊勢乃産なれぞ知らぬかもんとは、いふべや。海老もいふに答へんや。其外、麻に棹のつれ、妄曲なる、百に一を注しければ皆古人の涎をなめぬ。世にいで、浅すく、翁の句、通暁し難きもの多く、後人て迷ふ事甚し。古来よりも和歌の俗注にも加ふる事多かり。西行の鴫たつ沢の鴫を、死木（シギ）也、卒都婆の事なりと云ひ、又秋政の表なりけるを、天晴（アッパレ）と自慢のやうに注しける。或ハ志めし自然乃法しもかくなきを志めしける。三界六道よ云、法しき事をへ一切衆生の心なるといへども、いふに觀世音の詠なれども加へる

を附會してゐん。又ハ平の忠度乃引番ての文字を行来せしと。解きたるは。是等ハ反逆人の流なれバかりそめにもいふまじき事をかしくバ。古戦よみなどのうちにすれハ世にも憚る事なきにや。変にも木曽の雪解乃句を。義仲の勇烈に比したるハ甚だ正統なれバ。此の人嫌忌ふべし。

評林ハ。多く世の好みに随ひて一通りに解けり。正に似たれども。粗見解の違ひあり。鏡のしら花梅のごとき。無理無解の沙汰と云ふべきか。諸中多く。古事を引出すといへども。是又いかゞやあらん。翁句を綴るにものみて。古歌をとりて案ずることあり。又古歌を好まへ一概したるものあり。風と吟ぜし句。自然と古事にかなひたるもあるべし。一向に古歌古事に寄らずして。俳諧の句なる有。句毎にかゝはらず。古歌をとりて案ずるも亦煩はしかるべし。翁乃本心。何ぞ知らんのみ解合はるもや。それ而已ならぬ句にもや。古事を合せ評せんハ。胥ろ翁の意を破るものなるべし。おそるべし。

評林と云ハ。史記評林も。漢書評林も。諸史百家の評をあまたあまた集めて林のごとくあればなるべし。何ぞや。一己の評をとりて。林といはん。是も亦題意のたがへりと云ふべし。

句解ハ。三部のうちにて。尤正しく。其奥旨とところを得たりければ。粗。爪ばきありて。備へたる古事古哥等引用説も見えし。是を亦。翁乃心骨にあらじ。猶て證哥のすゑ。誰にも論ずべし。ごとくにいはば又。其句の餘情を解きしたるは。古哥を用ゐしかにも有べけれどもを引用はず。齟齬すると思ふなれど。又後の人此。迷ひあるべし。

又句の云ひやまり或ハ詞よ不叶たるなどと挙ぐる。左なきす
みちもあらざる所ゐもあれども。翁の句怪しまざるハ。余多ありて
是をもらひ其をえまと。定めがたし。世々乃和弄動揺ありなかし
てかへりきたるを知るよし也。されバいかにしく是がよしといふべきを以て説も
すくなく。万葉の奇をもちて出して入る迄もあまりありて。古き
歌の詞の面白きをとりて。像事ハ思ひて是が其外と定む
其ゆへ皆増て今の人にして。七十余年先の事を。一己として。正
偽ハさだめ難き也。句意の深長なる通融し侍らバ。予まても何
じ此事みやと思ひ侍りぬ。
扨も翁の句ども。註し解し。注せんに。七十余年以前なれバ。

多くハ今の人乃推量の沙汰にして。証となしがたし。其推量
に。好悪ありいかがある。邪推あり。暗推あり。ゆゑに家々の法
みなさまざまにありてもなきものありける。丈を何なにとなしに。
面くみ我好む筋によせて。面々の好を造り立。胸中に
有て推量するゆゑみな誤あり。誠の芭蕉一人をたててみる心
骨の風の寛なる。和なる。活なる。優なる。温なる。穏なる。無慾
ハ其性乃天然にしてそのうへ。無欲なる。無我なるを専らにいづれ
るたのしみべきや。今ハみな世の人ことに勝たれども。我を面々に所好
しそれ〳〵にあらそひ。句評ハ十人が十品にわかれて。不和となる是より
里生まる小我ゆゑ。我一己に欲く無きをや。予ら是を救ハんと欲するなり。宜す

三十餘年にしていまだ風体を脱ず。三ヶ乃誹者をまよはしむ
るのみ也。只唯真の翁を腹中に納ならば、誹りそしるも疑
ひん。此説は翁の霊前に一華一香をたむけて一字一涙の論
なりし。かん人これを推せよ。
爰に又二三子の人々は翁の正風躰中興乃祖師也。句を謹を
むは無外也。唯にごして過なむと。此翁温和なるに似たれど
も、いふ人あり。万葉紙はじめ勅撰の代々の和歌、帝王后皇を
はじめ奉り、人麻呂、赤人のごとき聖仙の詠より、心敬、宗祇、
契沖はもとより、季吟、山井など、その代々の地下の学者た
ちいづれも注して、後人のさとしとなすといへど、悍多しとやらん。

之のまことなるをしれるもの少なきて、世乃鑑とも用ひらるゝなし。
れども志の始へらんとせしは、ひたすら我かしこからんや、増章
誹諧なるものや、二三子もまた古くことをしるものあらん。
近来わが我門派の誹諧をば、兎角に禅意をもつて解し、又は
禅旨をもつて附會して、無理無躰に禅門へ引入むとするは粗
忽なるべし。是甚しき誤なり。翁は佛頂の弟子にて禅に熟せら
れ餘力ありて、季吟に誹諧を習ひ、正風躰に熟せられたるは
乃ために禅を学び給ふ。禅のために誹諧を習ひ給はず。只ちかく世の理
學の二つの道において、風雅の句みちを理すなきらふなる
由なり。助けとせんは可ならず。誹諧は禅をもあはせんとならば

単は、つてあらむ。世よ云。詩や禅や。誹や禅や。といふこと我耳にすてゝ心に思ひ違つるなきにしもあらず。そこ全の如しみたりき也。

渠を憎むよりて記すにあらねど。是我筌をもよりて説よりけり。ふきは天地より緒くあり。地は天地より悪し。これ正理の志のからしむ。許古今善通也。唐土に刺孟疑孟のたぐひ。佛に誹諧拾遺。誹に載るとも其理を退けり。説叢を見ん人。我をうらみ給ふな。うらむは我のより。井蛙拱識むかし誤りなからむ。後の君子ます出て訂考せん事を希のみ。

以上八條總論終

蕉翁發句説叢大全巻第一

葛飾　素丸著述

同　南臺撿校

春部上

年〻や猿にきせたる猿の面

【紫】云是ハ世人のいとなむ業ハ果しなく日をかさね年ハ積りてことも前よりかはる事なく唯猿に猿の面をかぶせたるに似たりとよ也たるもの也【解】云按るに六窓一獼猴の心にも通へり。元ハ只人乃心の彼に移り是非善悪生死無為の道理を探り。彼猿に面をかぶ

さて海棒ハ先の句ふうとさる翁の観念に（七様の句無益 身ハ元黒きに）或人云さ世然
翁生辰後光明院の御宇正保元年甲申依て此吟ありと此説
理屈なしてお話し（許六の風俗文選にて引説 なれとも無益なれは爰に略）林 此句を出さす
説 袋 すなわちなれど似たる事なれば 解 観想のことなりて
常にす。凡此句に。あらゆる古宴詩并を摘しかぶり。廣大無辺
ふしぎん有限里を分の事かぎして。皆勝道のなりぬるに帰
まうものなれは。かれも行きし事にあらず。同前今日の身に。
無常を詠みし評をいはゝかへくのなりす。〇去来抄に曰此句いづれの
所か来旦と聞得んやと。翁の日もしくかれいうに申しそや。
ハアツ已中に退きぬ。云云〇古今抄にも云。此句は及ばずに。迎年

の意は籠城かりて掟する宗旦の詞なけれど。芝なりは雑の部
にやいなむとぞ云云〇百菴が万々葉にも云。年々歳々人不同花
相似と云ふ可手と云云。花あるは芝ばらく似たる所ます。さりながら。
それは観想の類に深しとなり。〇近来祇徳が翁の古論をひいて
十二月の餅なり。旅泥の句とも文へかりぞ。此句は家なれ句
なりとして。祇が方には菜として定しるよし申侍へしかども
て古論の本意には不申し渡しぎぬる句々多く有なるべく。宗
旦吹かなやとたとし家なれ句とし文へらなりし作句がいへ
ず。近来偽筆なとに數し。信用しがたし。宗旦なるつとは必
定也。〇往年甲刕の稲中菴黒露に問ふに曰。此句なりし出所

あるとき。むかし深川の素堂よりある年の暮に文通せられし時。文章の末に二句の新語有。翁も此紙を拝しおりしながめましが。其翌年乃歳旦也と。素隠士よりのがれりせる也。二句の語を手に書てあるかな。此猿此事殊に喜ありける湯まぞ家に解し得し。右二句の語乃ことりよりゐる之なり也。師得を交ゑし。

誰やらがすがたに似たり花乃春（しらぬてゆかしと云事似てゆるの義也）

【袋】云是閑居の後にしき事に遠わかりぬれども其の春を何と思ひぬ。鮮を誰ゆゑ出ゆかるさとよそへての作也。或人曰世人のみなくしきに出立のさまなるに引かへたる姿を誰やらと離なりたる言なれぞなり【解】云大路長安に松立りてせられしは先源氏或ハ五十五中将なんどの衣冠優美の姿に思ひ合せられしか或云行右の松は松風吹かれに寄りそひて来る中律白浪 後成に冊経を移し出る詞に聳は八句有翁の先翁白髪なるゑ禅仏帽子に紫檀の杖うしろに虎皮を松下の巌に敷て嘯き遠見して利琴をかきならしらを後寫に松風わくく吉信かよへる文字をとりて紀をさしまする 下略 只うちしきゆかりのくかくちらを指せり【林】此句を出さず

（説）【袋】の注文多模羅含糊。一句に用ゆるにもあらず。春を何ともえりぬとは。いかなる意にや。世の人は是を何とかりふみや。

海ぎわりまるる 解 ハ隠のれとえ芸ぼらく擬ありと云ぞし。後成公の弁ぬ曲よ人ハ位高きを諷諭し給ひし也。此句は元日の船ぼらけ乃景し純風情を申されし。然て一歩千里ぬ遠ひなるぬ文形なきものにうつらを持となハ此句ふかぐらず。諸弁ぶかとうし ○ 白氏文集に唐の延陵妾が容を称美せし詩ありて。端正容貌若陽春とあるより出し此句や

○ 句意ハ元旦の曙乃気色美しく人物の威儀れ正き風情ハ文延陵妾が姿に似たりと。一轉して俳諧一道の活法也。此栄笑が論ありて。和歌の流余にもおられ見。翁の句。其のうよかぐらず。めでたき出し所より始まりて。和色振を取りまで。穏なるまの迄。

遠き段ほどして。おのが世にて錺なきすハ。翁の心ざしならず。山家集白氏文集ハ。翁平生に愛読を怠られし勝元の云しを。全篇をとも見ずして。言やりし。人の学分を。学文ともの人がしそ今ハ多きれ。

雑人か新まりて在(います)て来ル乃春

解 云孫晨字ハ元公 章益なれと下略 袋林 此句を出さぞて

説 孫晨が事一向ありしず。古今なき宗の人を引出んに限ある至りしに。其と新きの違ひあいうるぞや。兼好ハ逆然くりさ云句の。引るゆは似合ひれすかし。かくのごとくあてハ。翁乃

胸中知らることを疑し予のうにゆかぬぞ既よ。◯涼袋が。片哥二夜
問答にも云。世の人初番のためしとていつまでも行うらしき衣よ
替らぬ中に薦がむしろ着てゐる人もゆかし誹人の薦芯
ていはるとも事文豊なる御代の春へに誹人の薦に着て
居るもいつまでも新腑ならぬ心あらんとも此論とその句
意の事にはあられん在の詞下賤れ者に對してはうかふ詞有
あらぬ中略とかやとかく下 近比芭蕉句解といふ冊あるを見し孫晨が
乗せて引ていふ大に当る論有し孫晨が事を挙げて誹人がこれ
無座きや文披廣の眼もたうひ句作をかくはゆうしまでも何
る事なりと云 ◯右の問答の善へいはすの詞。下賤れなりのみ

当らぬといふにて。長くしを述しぬ。此作者を余。此句乃婦女なへ
へ知らざると覚えより。句評しそうちてらを捜して一向ゆゝ
らぬぞ。燕寿と云ばまや。誹人乞食せのゝ思ひしは淺きも
誹人乞食にいはすの詞をみましい何成ぞやと深くさぐり
見ぬくゝ偏辟乃論者と。世に笑わると也。在の詞みなづきな
ば早く知らぬ座きを◯馬光家書の内。素堂夜話同出
に云。我素隠士に。此句を問。素堂答て曰。是いうれ。片居山
の織人也。十二月に走子對面ありし。歳旦にも海十のりれど。橋の
りもの乞食えるにつけて。何となく思ひ出して。吟せしぞ。翁
もはやこの批評あり此と。如此澄説ハ夢にも見ぎず。然更

なりといへども。物事を迷ふ此の世の数々しきにはまみて
形すなり。信じて敬ふべし。黒露国解。国派ふて依るのみ。いは
その調よく叶ひりと見ゆ。下略に似合ふがと云人に。春秋傳を
よませなば。一足も動くことはならぬと云ふ
ども。むづかしからむ。○日本紀曰。推古天皇。二十一年。冬十二月
庚午朔。皇太子遊行於片岡。時飢者臥道垂。矣○元亨
釋書曰。推古二十有一歳。十二月朔。太子過片岡見飢人。云
家の多術ぞしますと四方の事ありて
酒更しも飯をも元日は昼まで休みて
曙見ならしける

二日にもぬかりはせじな花の春

【抹】云。雲水の風情なる人は元日は朝寝して一とせの曙を見
ぬ。しからば隠者乃境界も二日にもぬかりはせじと。二日にも朝
寝して谷の暁を思ひ寄るる世の泥濁の更に移りて腐原の腸を
探りするなる心なれば。ぬかりはせじとは白氏文集勧學詩一年有
陽春之 吾益なれと下略す 【袋解】此句を出さず

【説】【抹】の此説。文意例の模羅含糊にして。わかりかねたり。前を
ならべて。昔より友の集りて酒呑し。翁をも酔てはられ
し故。終に朝寝して。宣まで起ざる時はなかりき。是は去年

閑樂のさ備みて、世にかゝらぬ所え、されば目覚てねくなし
きけ一とせのはじめに曙をえんとやしけるすよ、さらしく二日
それもぬかりはせじ曙をえんとや、二日とれもよしむの春よ
てこそあれと、凝滞をさけ、むの徑を賞さし免しぬかり
はせじなへ沙汰はきぬと云義みて、變を俳諧の活所とえや、
林註のめきれは、うきし斜めしろさ後みやりし、さへ今時のす
をかぎる賣價隱者のさ備みて、翁の為むよる夢ぢ、ふあ
ねらぜる也、其詞をよく味へば、この廉評と、又屈平ぞむけ
る事なるぞ、渠は忠誠の大臣と、桑門の類ひよあらぞ、去ち志氣
雲泥懸隔のたがひと、隱逸が百菴などんさん、翁よ課罪といい

ちるとぞかし、又白氏の詩に、いぬかりはさじなの評みは似たる
ありぞ、古語ニ一歳計ハ在ニ元旦ニと云語と、白氏をとり用ひし
とや、何らして、ぬかりはきぬとらうの、此上の無きや、嘉さぬのなし
評と、丁新。

ぬかりはいず、まちや伊勢乃初便里

荻 云伊勢の初便は、去る頃は元日むかうことはずての賦稿し幸
逢來有伊勢海老伊勢の事は知べし渠小なりとも必ずたやすく
林 云並録の為に此義をいせうよかる人を信て役婦しき花林なれ
淵亭をなすらして何とも能く様子構を句中にして蓬萊なるよせ

○巻第一

ける新年 解 云慈鎮和尚の哥に 旧しか有略之 此詠によりけるか也
なりし尋常の人は元日と無造作にて蓬莱と形容もしける
は例の風姿なりしより 下略す
説 袋 の注一向邪妄信用もなし。伊勢海老いかで参らむ。
林 小児のことのいふべし 解 出題するは。支考が為弁抄。去来抄
に委しく論の趣すでに備はりぬるを。蓼太が解もなるによ
無用なり。○十論為弁抄云 前文は略す 初便の句作者此趣意は
はかり誹諧のうへの名人の句法ありて蓬莱のなりし
なれば人の及ばぬ所をとらへて乃今う継ぐ元法は誹諧の第一
かける也法なし論は作者の外で行ふなくうちにかくうし何の
何ら新たにとして又なき所の僧の又強ひて法は又我心に知る
此不は震旦に蓬莱のふりして人の及ぶ所にはいかに陳云
誹する所なし此句は花林子が年々にまして伊勢海老を
を見て誹しる元日にと並へこの蓬莱の手ありて蓬莱
の姿をよせてん例の意を彼是見姿を破るとも云句は
也風雅に姿其大事をましねも意を破るのあるとはすると云
に一見して感じたりといふ。俳諧は十人十色なりて唯
佛與佛の究めたる所市に伯楽乃目利ありとも云其ぞ
と後に晩して解すまじきを為弁抄に云とり。又古人の云ける
ならば。そのかみを及ばで。猥勝にもいはんで不情。古法を及びて知

らずて我をみえと云事を。

㊟慈鎮の證歌書たるのは。此奥にしるせるハ全く誤也。

○拾玉和歌集 慈鎮の家集也 第四。賀茂法楽。詠百首和歌夏十五首のうち。ほとゝぎすハいせにゐる人とこそ。此歌。何ともなし。定家何ともはかり難し。法楽乃年月もしられねど。難文おほしてさん難し。文類句あれば此後のことを出し。使ものするし出されど。家集を證としたるなり。○百菴が万々葉に記せしも拾玉集をは新句ばかりひろへる夫木集にも載る。永宗の慶治本なれば加へしを知りて其四句をしるせる者。書冩乃誤は今さらいふべくもあらず此春の中に略す此等難解を見べし

慈鎮和尚の真跡乃一帖を発見して。此後の歌決定しぬべし○

柑子の事 橘ハ。日本紀に。垂仁天皇御宇。九十年田道間守を常世ノ國へ遣され。橘をもとめしむ（世俗。田道を姓。間守を名とすといふハ、ひがことなり。田道間ハ今の但馬国也）る。あまねく人の知る所也。其後続日本紀にみえし。柑子乃来りしハ。神亀二年十一月己丑。天皇御ニ大安殿ニ受ニ冬至ノ賀辞ヲ一中略 中文典鑄正六位上播磨ノ直弟兄ニ並ニ授ニ従五位下ヲ一。弟兄初賷ニ甘子ヲ一従ニ唐國ニ来。虫麻呂先植ニ其種ヲ一結レ子ヲ。故ニ有ニ此授一焉。

今とちりてハ。種々のかうちあれども皆同様ならずして。少しく異なるのミ。本草を考ふれバ。橘ハ小くして。味も苦くなり。柑子ハやゝ大にして。其味の甜なれバ。やがて甘子とハいへるなり。上古ハ皆

橘のうちみて。など峠といふ説かつげとハ見ゆる也。○百菴万之巻に。積之の説を出しられたる。此句に柑子を用ひられし。橘ハ倭俗のわかれ。谷積に杢抛し。橘なき時ハ。柑橙を代りとす。○愚按ずるに。此すみれ花かつげ也りしや柑子の花にはあらざるや。浮世の人より香合なぞにて花を入て送りしを。花かつげとハ詠じたるとかや。然れども清少納言の枕草子に。五月朔日などのころほひ。橘のこくあをきに花のいと白く咲たるに。雨のふるほどめでたきに。よに心あるさまにをかし。花の中よりこがねのたまかと見えて。いみじうきハやかにみえたるなど。あさつゆにぬれたる実も黄ばみて。葉もなくて。有しとつたふ。是を花柑子と

はえあるにや。稀後鑑を俟の之。夏の法楽とせらるゝ事。季の違ひあらんかし。

(説)蓬莱の臺万之巻に。積之の説を挙。其博識を見せんためにや。歳時記。并年中故事要言などを。倭俗の習ハし。蓬らいといふハ。谷積のさまを。名をかりて。嘉祝の号とせらるゝの也。

○百菴云慈鎮和尚の詠万葉集れ古学より後むし歌ハ此和哥よハ目もふけ次文五百年以来の奇を貴とせる歌客ハ四牙鑿の説を嫌ふよう古よ要領とする事なし就是就非余此句を相兼て花柑子の奇れ有別勘胸臆の説古よ略之進る句もみ。別よ有二一論一無レ誤芭蕉老人を門牙及好事者润色して課罪

可謂遺恨乎ともいふべきなり。いづれ此句を解して惟式台の
解をいふべきにもあらじ。思ひわけて稲中庵黒露をかくいへりき。
我は句の本翁へ添ぜず。黒露がいはしは、是尋ね侍りしに違
して云はざるを、去れて是能にもしかば。すこしにりとだつ
里紙拙淺思しが、和尚愚叟等いふ者多きりしてありきと。此
沙汰するにいはれし。老人とはかくめしを、今或るにも聞し
称し。翁の句とても、初後きれば伊勢の俊りにして、地面の
便りは何かなしとも。◯去来抄に云、深川より文に、此句は
深くの深くあり。汝いかが守りけるやとなん。去来曰、都古にて便り
ともあらず。俳世と侍るは、元日の式乃今様なるに、神代

を思ひ出るに。使者もやと。御祖神のなや胸中にさはがしき
ふとうけて、祈り侍るその中。翁曰汝は永く吟ず。今日神祇の
かしく蓬莱より其心出て。慈鎮和尚の御歌にさより。初の一字
を吟し出し侍るに、もとより文端に。伊勢の人がこつけて
便りありしと。慈鎮和尚のよみ侍る。便の一字を出所みて。御音
のかはたよりす。汝が守清浄のいろりしく。神祇乃かしく
蓬莱よりて。蓬莱に對して詠ひけるも。汝が不孫重也と云云
此説秘蔵なりと云へども。妄説にもちくなれ。初案の迷ひ多け
ればこそ出しぬ。翁の自注も目をまはれど。是をもつて正證
乃句解とすべし　完貧　云々

おこら子の一もとゆかし梅乃花

【解】云おこら子ハ俗言にして御子良子也太神宮の神饌を奉るてふ少女也神前梅有なれば此吟ありけるとて【袋林】此句を出さば

㊟説 此解拠ありと云べけれ。然れども。梅樹の稀なる所に。此吟ありといはんハ理屈に近くしてをかしからぬにや。千梅が篗纑輪に云爾ときこゆ◯篗纑輪云ヲハラゴ太神宮ノ神饌ニ奉仕スル小女也ヲハラゴハ俗言ニシテ本稱ハラコラゴ也伊勢神宮ノ内ニ子良物忌ト称スル社家廿七人家有テ其娘ヲ以ニ神圍ヲ備之其父母共ニ居スル室殿ヲ子良ノ館ト云是則神楽殿也依テヲコラゴハ御神楽子ノ訛言也トモ云リ(中略)又按ヲハラゴトハ御祓子ノ略ナラン俳諧ニハヲハラゴトモ云ベシ俗言也トモ世ニ久シク云習イタルコト最可用之ト云云◯子良の館と云事祭典式にも見えたり。御ヲと云ハ俗に濁していひならはしたるなるべし。◯此句一もとゆかしと云を沈吟して見るべし。是おこらごを指しての形容の賞詞也。梅とのみ見るべからず。梅ハ清浄潔白なる花なれば。此おこらごの唯ひとり端正にしてよく神慮にかなひ仕へ奉る事を。梅に喩へて賞詠せし句なり。句乃正脉をうしなはず。句意をもかくて。第一とも云べきなりや。梅樹まれなるは。ゆ

しとハいへども。何がゆゑし此みや。梅咲けて少婦貞女を
比する例。古今詩歌などに。多くいふはなし。

神垣やおもひもかけず涅槃像

林 云伊勢ハ日本の神社にしておもひかけざる此一州なり然るに
寺院に入りておもひもよらぬ涅槃の法会を拝しかゝる神垣のうちにも
事もまた仏法の尊さも現世未来をも兼し句意なるべしかゝる
神恩にも又仏恩の方便もいつもよくも尊しと何とも文字
よりも哉されたることくなる恵みにも又ことく未来の冥
多くし施行法施何ぞよりのおかしく給ふとへもてなれともかなしけれ

さみ洞にいりて趣深き也可尋也 解 云金葉神垣のほとり
とおもへともまたず此おもひもかけぬの言葉けんなくかなしく
て無為迅速の句情なるし 袋 此句出処
説 林 一通りハ似たる句なれ。思ひもかけずとハ未来の心
たとは。一念と。入りかゞの妄注也。和歌連歌ハ三世のうちをもとよ
古き連俳集要と云書にも。三世不可得の證句とありき。芭蕉
よりか様ものうし此理屈ハ捨てらるれどもなりき。夕顔や
秋ハいろいろの瓢の句と。色現未乃三世をこめたると云ども
云ど云なるべし。理屈ハ風雅の海にあらず。入涅槃ハ誤也
何よりて撿校もをとして梓に新しく兼未え。又何とも云べき

文字よりなりさしてことし文脈一向やうさは西行の
奇なれ。何ぞの何といふ詞の事にや。云ば法ありてあるべき
を文西行の歌にまされる所の事もあるまじ。ずなる人あ
ましても。尤こん翁の句に背けるなく。文西行の歌拾ん
当らず未常なりし。自注の引歌とも云難きものなり。此歌（但し西行の歌に非ず行教法師の詠のよし也）
家集ではなき諸云にあらし。只世俗乃云伝へしのみ也。是等を
引出んもいかがみや。解 大に当まり。引歌とも間よ違ひて是
以誠ふ為に百錬千鍛の功ありて感あまりなる。○笈日記
伊勢部よ貞享の間なるべし。此国へ抖擻ありし時何が
寺院よ詣でと。詞書なる。伊勢にてといふ詞書なしにや。いなかし。

説 とも見て句を深く味ひよ。似合しき事どもを見語へ
文章ありてかざらむよ。やいふらわざ傍なすやいなる見き
それは翁の心骨よあるを。伊せは日の本の宗廟あて。猶も
杉子を。其一国はかしく蔑。神乃しき御中にかふしを。涅
槃の像をみんこそ云ひもよしぬ。心ちしてそらしく
ころ即俳諧也。神仏一躰のうへにも。云ひ合を見られど。熱
論にいふごとく。推量の沙汰にして。翁も此心なく申されし
よれ。却而翁よ課罪と。百菴が論をし類ひなべし。唯思ひ
もうけぬ神社にて猶さん像を見ゆるてとをかしくも奥ある
と申されしのこと。蛇足を添る事なかれ

梅わかなまりこの宿乃とろゝ汁

【袋】云此句乙州か東武行に餞しての句也 中略 句意は東武は名物をかぞへて面白き時の季を出せり好士のために注を略して

【林】云上略 旅をするゝ人の名殘をしれ風景を一句に案内させて送りし是風雅の友の志なるを顯はすなりけり【解】云乙州大津より東行の餞別に梅若菜と青白の色立ありて面白き風流さることも一家の心を顯はすかし 中略 此句三段切口受

【説】【袋】東武の名物を隠して云ふは。ぬかし。へうかうとやいふてむ。又面白き時の季を出せる發句やいかに。何よりも。行命ぬ文意也。【補】俳友の志といふなるべしや乙州(ヲトクニ)は翁の弟子にて友よあらず。此旅行の時。翁より東都へ送る其角亭の扱ひなる門弟の文躰に。真跡集二出タリ【解】大に據あり。然りといへども色立乃事は。全く世の好み句にも。翁は何心なく。梅わかなと。當季のものをかぞへ挙つらねたる也。謗りまで優しき事は嫌ひたりし又。萬翁よとつては責る所なるを。青緇の色立とは。康のむや晴き柳の皮織して。青白黒の色立といはんや。事を好む人を清どのすゝむぞ。

○句意は。梅も折らとりさかりに咲あれば。若菜をつみやうに。携て鞠子の宿ふは。淋しくもうしきとろゝ汁を吸ふと。道

すゞろ乃心で魅めかゞら、一を言ことには、無益の義つらふな著
そぞしすなよ、義なりとて饒舌なを示誡せられし也。芭翁
の心骨也。能く可考也。○三段切口変をいれども。古今抄にも
併は悪し。一度見し人ハ可解を僅し。

三段切

目には青葉。山ほとゝぎす。初鰹。

梅。若菜。鞠子の宿のとろゝ汁。

○再撰貞享式云 前略 前章は素隠士が鎌倉の吟にて此句
の称せる所ハ同じと語勢をいひ称して耳に口にと心で細く
めぐるは影畧互見の法にして芭蕉を三段の切と言べし
梅若はまりの餞別して旅をうられ優游なれは梅もわか菜も

ありて鞠子乃宿にいとろゝ汁もいかんと云ひやりし情風情なる
なり。若菜は植物と食類とに結前生後の働ありてところ
は梅わかなのはなやぎて前も十歳の俳諧躰也。芭蕉を三段の
如節と見るべし。畢竟ハ句中に切字なけれとも芭蕉に大きみ
差別をすりて三段ハ例の三別なるとや 云 云句法に益ありと
いへども、初学此口僑くして迷ひむすを欲さん。今又絶しぬ。

ちかふるやうにおぼえて琴の塵

林 云簫の支に春鶯囀の曲あり是ハ秦始皇の時蒙恬と云る
人初て作る所なり也詩にも林鶯何處吟簫接嬌柳誰家曝 廿二字出誤り不解

○巻第一

麴塵【解】云是ハ楽器乃画讃也劉向別録曰魯有善歌虞公発聲清哀拂動梁上塵 はんみかよつりの梁上の塵を落せしゆゑにいひかけたる俳諧の手妻なり千鍛を称すべし【林】此句を出ます

【説】まことの妄注耳にあつて鼻へぬけるといふ屁なし。又文義の一まるでおえず。又春鶯囀の如き晴衣に礫すぢなし。簫ハ和名抄。風俗通云。舜作簫 先堯反。和名。世宇乃布江。箏ハ和名抄。風俗通云。神農造箏 爼耕反。俗云。象乃古止。或曰。蒙恬所造。秦聲也とあれば簫と箏と混雑なるみや。琴の句に簫の注難語せられし。又詩にもといふは詩経の外ハいはぬ事也。誰の詩集にも。此をば法ならを忘れしぞや。おもしろからん。先引用の詩を示す云々やまれり

○白氏文集 二十八巻 天宮閣早春 律詩 天宮高閣上何頻。毎上令人耳目新。前日晩登縁看雪。今朝晴望為迎春。林鶯何處吟箏柱。牆柳誰家曬麴塵。可惜三川虚作主。風光不屬白頭人。とあり。全体をよりて出せしなり。篇挨といへどなほのすみやかならぬさし。此二句何として此句になりしもやすしいで。鶯をたまはねぬるかたを柳といふ句には引直さずや。又琴の塵といふを解きぬまに。麴塵なとの事にもやと附会せしなり。飾抄に麴塵なとをなし色とす説ハおよそなきなるべし 麴塵ハ黄なるかうし。柳のあをきもとなるはじめの黄色になるなり。それを麴黄といふ。天皇の御衣にて色すくちんいろばかりは堂上の人ハ着ることなし

十七

るさまで。只荒人ハ。抱頓しておるなり。糀のちがひをしらざるなり。
商家の糀ぢやのからりなし。是れ違ひ家にや。いづれにも。
評林の説大にたがひて。亀角云にも及ばず 解 劉向別録
の語相違せり。然れば此書ハ。今ハ亡滅たれば。其全書
見る人なし。只其のよ引たるを見るのみなれば。か異ハあり
ぬべし。然れども此虞公が古事ハ。うたふ夢地より乾と云るなん。
今ぞ世にある歌妓浄るりに。かたり人と云あり。語る人と云ゆ
るがごとし。虞公ハ諷ひ人て。楽器の手にハあらず。此句よ
いひはたらく。かよいぬえ。まうまでも楽器乃讃と。眼のつき
たる所ハ尚なり。去ながら此楽器ハ。なにならん。○此沿

をしらぬことも。可惜ことなり。○句 手扱ぢやうた。此句ハ楽器にあらぬ
しらぬ琴のちなるべしと。琴の古事によるなり。○列子曰瓠巴
鼓琴而鳥舞魚躍。○史記二十四巻楽書第二曰晋平公曰寡
人所好者音也。願聞之。師曠不得已。援琴而鼓之。一奏之
有玄鶴二八集乎廊門。再奏之延頸而鳴。舒翼而舞
云々。○此句意ハ琴の画讃にして。此琴や。誰人の弾くらむ。
其ひゞきハ清声にて梁上の塵をもうごかし。清韻にハ鳥集て
も感ずべしと。琴ハ徳を称せしを。幾るもの少ならずとも
入れながら琴の藝を見て。それをたびかきならさば。まさ
ちらるゝも解るべし也。翁の句にハ手づまさもしろし。慶哉

○巻第一

落葉鶏鳥に云ひならはしるといふはみや。準らへし事と
はなはだ文法え。文覚程のすの。翁のみにきらはれしや。
千鍛みちひくぞ琴をひくぞ。花も吹落て此蘂ともえ
えんとの風情摘出之。画讃の句幹也。去れば画讃といふ。
慥なる證跡なりや。何をの集みえ及えぬに。○然るに
往し年（明和戊）秋二六庵竹阿坊。四國九州の行脚終りて
帰りせ序に。世説の撿校きよとえなせしに。一閲してちと
こまでとりちて曰。此琴実に的中せり。我四國の漂泊乃比
伊豫の國松山なる何某の家に借りし。三幅對乃軸物あ
りば句を中にして。右は其角左は素堂也と。手左右の句を問ふ

ならふ讃とぞ云ふおぼえて（明和）春すみやかに信ぞなりしとかうの
松山の何某氏許迄云ひ送侍に。卯月の末やうやく写しを送て及るく

樂器三幅對　画　探雪筆

左　太鼓

青海や太鼓ゆるみて春の聲　素堂

中　琴

ちる花や鳥も驚く琴乃塵　芭蕉

右　笙

遂鳳凰

[illegible]桐乃落葉や笙の聲　其角

あるにおいて予始て歎息す。不指の人名ハいさゝか故障ありけれど
略しくハよその事にすれ出さず。且翁予が方にあり。故ハ
人ハ甚見てたのよし。嗚呼幸哉

腫物にさはる柳のしなへ哉

解。しなへとハ出せしなへの下知の詞なれども上にさはるといふ下に
しなへと云てより上よりさあれも是非しなへ中々ハ哉
ともいふ也何にかなもまじハりやすきこと

袋 云此句ハ柳の嬌なる姿を人間の方に譬へていふて腫物さすりて
にいふ句ハ此にて取ちもかへしさきるやさし此句にて云てる句
也 解 云許六か宇多法師ニ腫物にさはる柳と翁の短冊を
不指とハ諸集に出せる所のさはるハ誤と記せり接るにさはる柳
なる翁の筆にて柳にさはるハ例乃再案の栞背を見つてり

此句法玉連環俳口受にして詩奇連俳となるにはさらに余集たるが
るし事なし 林 此句を出せし所

説 袋 嫋しくれ立ぐ正直也 解 去品の事也。左よ。去来抄
にて引て委しく去す。又句法の事ハ後世好事の媚にて。翁の此
如法なきていふ。あらじ。支考。去来。許六。何を出しならさん
や。是なきれ證據也。詩法。あながちに用るにもあらじ。不及事也。
又云此を余家詩前連俳ともいふ。詩にも余集といふ事ふ聞。
五老井和訓唐詩解あり。倭人の詩よりも余集あり。唐人
の詩よりも余集なきを論じ居てり。是に云ハ倭人の
詩ハとも。又連歌にもなき。詩句の法をも。句作用ふ用る事

なりやと。諸宗匠に聞合を給ひしかども。中しき。
句案ども。詩句の法を合せて。考へしは。却て句縮て淡
甲て。幽玄躰出来がたし。○又ある人。婦人しきは。解有
字陀法師の説を挙ながら。柳のさくらを粉骨と称
て。玉連環略などの。句法を出せ。ゆるず。見許六が意趣
趣へざりしによるか。許六の云處は練物よきさる柳の志らひ
とい詞の流を取りよくつゞき。正統なる所よしといふ義
し。見即玉のつらねめぐるごとくの詞續きて。腫物よ
柳といつゞきくゞしく守也。詩に云。倒粧法。和歌にも
備句法。あるいふ。志らしてなりやさしきやうなられども。多く

用ひぬ事也。文を却て。再案の粉骨なくして。推量の辞
をつけ。なりやさしきやうなしぬ方をよしとせしは。正風
躰とは云難し。續句に柳さくらとは。前に藕句の法と
も。聯句に藕意の法とも。詩に關鎖の法とも。以ざるて
なるものなれど。許六も。連子の混句を挙て。衣かは淺芽
といへども。衣かは里は淺芽にとつゞくは。和字の法なる
なり。俳諧亦。和歌の変躰の一名ありて。前にあらばし
何よあらんや。初学の口文口訣なくに迷ひむるを欲
きて沈をのべ○去来抄曰浪化集にさいる柳と出り。
是は予が誤傳なり。其元史邦が小文庫に柳の花は散と

段出す支考曰さはる柳といふにて段め侍るや　去来曰此
はこ柳といはゞ考曰柳の遠見は朦朧とさはるを比喩也
去来曰然らば柳の遠見にさはらるゝさはる柳にて
無根に遊べる者重て予か誤を糺さ考曰吾子の説
いはれたり只さはる柳と遊べし丈草曰酒の続きと
言る句題向は秀句なるてらくなりし去来曰流石の無士
実を遊ぶにはさかりに搦し比喩ふしては誹をとく云はん也
にさはるといふて及びも格位も示さず許六曰先師
の短冊にさはる柳といふを上柳のさはるとは首切之去来
旧首切きの事は予が遊ぶ集に実之今論に不及先師の
文に柳のさはると慥也許六曰先師の添削あまたされ
し句多し去除澄しかし強しとせ三子皆さはる柳
の説を得賢斟酌し給へ以上○去来のいふごとく。朦朧一
也に柳のさはりたるとして。一層向上の俳骨あり
なべて落柿舎主の風雅。もとより。高き識有て。世人
知事稀也。支考許六丈草などにて。去来の高識に不及
ただ今日ればやく耳に落て。世俗に近きをも思ふも
亦免之。予按ずるに。支考許六などの。敏智にして。去来の
意をも知らぬ事は。何るまじけれども。一句の寛厚平和を
わすれて。さはる柳と云なるらん。去来の。向上乃識は

ごとくそれハ。後世にあり。其節を媚る。好事の人。連玉環躰なれバ。句法を立ざれバ。其の横合と成りて。害ありなんてん哉。前に思ふ所なからむ。然れど。道を厚くするの心術。又及ふ所なし。文翁のちに大切の柳一本云来になづけ致らんとやされし。然ハ求るが如ぞ。ちかき哉の猶に徹しらざれば。なお知べからず。此句許六ハ前く見せんきしや。年月もなけれバ。どちらを芯極とも定め難し。されど。藝をば写神の吟。再案れ吟とわけて有るべし。推量の法あして。一己をもとれ。矩をなし難し。いづれをいづれともなく。のうかし。亦途行にせよ。さちる柳。柳の

さいる。どちら色。句意は同じ事也。後亀が柳ハ。さもしれらんハ。意を害を強し。あちらすむぢ。ぢ句意ハなしをさいるなし。両々その好むところ也。了解し無き。害ある後にくぞとひ侍らぬ。句法のことハ。くれぐれを。去来抄にも外古傳なし。傳の潤色と知るべし。

○清く此柳の。由来を思ふてと。今年二十餘年継し寶曆のはしめ。夏の曉の夢に。先僧卒然と来りて曰。そこは年月。此柳をながめて感ありて。よく知るむともなきぞ。右ハ拂子を持。左の掾にありしなて拂しに見よと。知り得しらんかハ。是等をはじめ。かくに偽説

あるの句ざを正しくして。是あれ古言のごとくするに。
果然と顕て侍らず。是實に數年の難を感ずる爾
なやと。有難からじ。されど。姿をたゞし至て。句のみれも
ていく深まる其。さ様くの理味に落て迷ひを出る
ならば。姿をさし給ふにあらして見るべし。眼前的當のはしかし
侍るに越ぬ事ぞ云ふ。世の怪談云ふまゝに出て。人の節に
すらば。猶またいふつるる事なれば、いづれにせん。實に縁て
我片言をもつて。筋革に解をしめるの術ありたやすく
く解しがたし。難信の輩にあるべからし。説叢の発起て
これなりて。八年に十年。今半が一をぬくのこ

大ひえやしを引のこし一霞（比枝比叡日吉ハみな仮名がきよろし）

袋解 これに一体の事を挙て云ひかゝり。木をあ係せんとし。

説 花雀が。むかし我句選に。泊船集をひいて。此句翁の吟なるよし或人にうかゞひ。實否は詳ならずと記せり。泊船集をとれよ。杜撰なる物也。此句も亦いかゞしき也。

あをやぎの泥にしだるゝ汐ひかな

袋 云三月三日の句也。此青柳ハ木の柳にハ非ず。此日ハ紅顔艶霡の美人汐干に出て海辺の泥中に様々なる姿

○巻第一

女を楊柳に比して常になき柳乃派に志てるとの作也

林解 此句を出さず

説袋 されども邪妄之。美人の幻しに出んや。笑而断腸とこそあれ事也。異端を攻るは害なりと云ども。初学のうちに迷はんを解く○本の柳とは人のあはれの柳なきは求多くひちてを律るた。これの汐干にてはわづらふ。派をさうしう也。此派にならひとても。俳諧のいろしきを知らる事をしるべきまへど。翁の心骨をたがへはれて。邪智を弘めむとす。魔道とも云べき者にあるともがら。可恐々々

木曾のなさけ雪やはえぬく春の草

袋 此題は元よりたしとも是は義仲の墓に文は餘讃とする へし一句の心は木曾義仲の素姓を云は隠棲をかくれし時を得て勃興し名を一天に發さしが雪をはえぬく春なる乃ちし此地は信濃の雪国なれば春草のたとへなりや

林解 此句を出さず

説 此注もなく邪推妄説不可用也。例の入るが。なほみやくの病なり。情は字義を知らべど。素姓気性にかかはることなし。此句の情といふは。春情のなかとし。陽気發生

5 年 3 月

の氣をいふなるべし。句意は木霄山家の雪國よりても。春陽れ
氣乃なきけれ。そのかぐはしさのよし。雪の中より。萌くを
ひぬけ出るよし。なるべし。春情と詩にも
の氣を表して云詞也。間關早得春
[illegible]なり可知。義仲の墓を画讃して。不決征
[illegible]句の詞をかしけるや。義仲の墳は江
[illegible]寺にあり。信州にして粟津の句などあん
[illegible]言の句聯にて決めがたし。木曽の途中の吟
[illegible]なりし。頭をしのぶ風もしらず。

蕉翁發句說叢大全巻第一終

の氣をいへるも。句意ハ木曽山家の雪国なれど。春陽の
氣乃あたりけれハ。さかりぬるのみ。雪の中より。萌くさ
あをくも。生ひぬけ出るよし。いへるも。春情と詩みたし
つらふは。春陽の氣を表してるふ詞也。閑蘭早得春
風情と作れるかも可知。義仲の墓ハ画讃なり。不決従
あらざ。何とも此句の頭をかしけれども。義仲の墳ハ江
州粟津の義仲寺におけり。信州ハあし粟津の句なども
や。又画讃の句解ハ決而なし。木曽の途中の吟
なりけり。顛をしなる處ハしらず。

蕉翁發句説叢大全巻第一終